

## 小結

前漢期に劉向・劉歆が提唱した、複数の文献に見える五行説を関連付けて説明するという手法は、後漢期に至って盛んに行なわれた。そして、劉向父子の時以上に、明証を求める文献学的姿勢が強まり、多くの明文について議論を交わすようになった。

その反面、明証を求める余りに議論が細分化・複雑化し、学者達は經典間の細かい差異をうまく説明するために苦心するようになった。例えば、鄭玄は『周礼』を中心とした經典解釈の体系を作り出したが、実際には苦しい説明やアンバランスな構造が見られ、劉歆の唱えた「一——三・五」の構造のようには奔放でなく、整然ともしていない。

五行説は本来、複数の系統を有している。加えて、經典の中には、そもそも五行を意識せずに事物を述べた記述が膨大にある。結局、これらを矛盾無く説明しようとすること自体が、そもそも非常に困難なのである。しかし、そのもとより無理な試みの中で、様々な工夫が施され、様々な理屈が生み出された。その産物が鄭玄注月令の「寒時、食之亦以安性也」という言い方であったり、修母致子説であったりする。

五行説には様々な理法が存在するが、その中には修母致子説のように、現実上の都合からひねり出されたものがある。それらを少しずつ説明して行くことによって、五行説発展史を更に詳細に論述し直すことが可能になるのはなかるうか。